

『あの日の空の詩』^{うた}

台本 しままなぶ

作曲 信長 貴富

■誰もが楽しみにしていた花火大会当日。会場の河川敷に観客が続々と集まってきた。ある若者のグループが土手の観覧スペースへやって来てワイワイとはしゃいでいる。ちょうど日が沈もうとしていた。西の空が夕日に鮮やかに染まり、若者たちの顔もオレンジ色に照らされている。夕焼けに見とれる若者たち。

(1) おさかな雲

(懐かしい童謡のように)

※詩の途中で途切れるように終わっても良い

西のお空を泳いでた
大きなお魚の雲に
お日様の火が移った

オレンジ色に燃えながら
あわてて泳いだお魚

あっちの雲にも火が点いた
こっちの雲にも火が点いた

東も

北も南もぜんぶ

お空の端から端までが
オレンジ色に染まった

街並みも

流れる川もぜんぶ
あなたの顔もわたしの顔も
オレンジ色に染まった

みんな見上げて笑ってた
お魚の雲も笑ってた

※曲中、若者たちの間に、いつのまにか一人の少女（アイ）が現れる。標準服に草履履き、防空頭巾を肩にかけて、夕焼けを見て微笑んでいる。手には一冊のノートを持っている。

■突如、オレンジ色に輝いていた空が暗くなり、真っ赤な炎の色がみんなの顔を照らす。

(2) 空襲

燃えている
燃えている

家が

郵便局が

学校が

街が燃えている

シューシュー シューシュー…

焼夷弾が降ってくる

あっちにも こっちにも

火柱が上がる

見る見る広がる炎 炎 炎

恐ろしく低く飛んでくるB29の編隊

炎を映して真っ赤な機体

パイロットは赤鬼だ

伏せようか

伏せちゃだめ

伏せようか

伏せちゃだめ

伏せよう！

伏せろ！

伏せたって 助かりはしない

ダダダダ

ダダダダ

ダダダダダダダダダダ…

■突如そこは学校のグラウンドに変わる。

※伏せの訓練をしている生徒たち（男子と女子が別々に授業をしているように表現される）

（3）訓練

伏せ！

直れ！

伏せ！

健全なる精神は健全なる肉体に宿る

竹の棒の上り下り

腕立て伏せ

土手のマラソン

（ふらふらとへたり込んでしまうアイ）

（ユリ）「大丈夫？」

（アイ）「大丈夫。お腹すいちゃって…」

（ユリ）「わたしも！」（ふたり笑いながら、再び走り出す）

健全なる精神は健全なる肉体に宿る
男も女も関係ない！

(4) 音楽の授業 (女学校)

ハニホヘト
ハニホヘト
正しい音階で歌いましょう
ハニホヘトイロハ
ハニホヘトイロハ

※一人、元気が良くて一際声の大きい生徒(A)がいる

(先生) 「音が全然合っていませんよ」
(生徒A) 「すみません！」 (みんな、どっと笑う)

和音を正しく聞き分けましょう
これがハホト
・
・
・
これがハヘイ
・
・
・
これがロニト
・
・
・
それではこれは何でしょう
・
・
・
正しい音感を身に付けて
お国の役に立ちましょう
ハホト
ハヘイ
ロニト
それではこれは何でしょう

・
・

わかりませんか

わかりないでどうします

これがB29の爆撃音です

さあ

どれがB29の爆撃音か当てなさい

・

・

・

・

わかりませんか

わからないでどうします

そんなことではお国のために戦えません

しつかり聞き分けなさい

これがB29の爆撃音です

・

・

・

・

・

・

■休み時間、アイとユリ他クラスメート(女子)が楽しく話している。

ユリ 「ねえ、また新しいのできた？」

アイ 「うん、ゆうべ書いたのがあるよ」

ユリ 「読みたい読みたい！」

※みんな集まってくる

アイ 「(ノートを開いて)でもね、これは私の詩じゃなくて、翻訳
してみたもの」

ユリ 「翻訳?!」

アイ 「(小声で)外国の詩。マザーグース」

ユリ 「まざー、ぐーす?」

(5) 月の人 (マザーグースより)

お月さまの中のひとが

お月さまの外をながめて

こう言います

さあ、わたしの起きる時間だ

赤ん坊たちはおねんねの時間だ

生徒 B 「なんか、かわった詩だね」

アイ 「ほんとね」

(みんな笑う)

ユリ 「外国人でこんなこと考えてるの?」

(みんなワイワイと盛り上がる)

■突然予告なしの持ち物検査が始まる。教室に入ってくる一人の教員。

教員 「何を騒いでいる! (みんな静かになり、自分の席に着く)

今から持ち物の検査をする。所持品を全て机の上に出しなさい」

■アイの持っていた英語の辞書を取り上げる教員。

教員 「英語…、敵国語の辞書など持ち歩いて、どういうつもりだ。

授業の後、職員室に来なさい!」

■教員が辞書を手にして行ってしまふ。

■教員が行ったのを確認して、手にしていたノートをアイに返すユリ。

■突然場面は変わり、校庭に作られた畑をみんなで耕している。

(6) 耕作・食糧確保 (男子も、女子も)

(作業歌のように陽気に、批判をたのしむように)

校庭に畑を作った

せつせせつせと耕して

太れ大根サツマイモ

そんなわたしは大根脚

足らぬ足らぬは工夫が足らぬ

鎌と鍬はきれいに洗え

兵隊さんしてみれば

農具は兵器とおんなじだ

なるほど焼いても食べられぬ

踏んばれがんばれ日本晴れ

腹が減る 我慢はするが

来る日も来る日も豆ごはん

毎日下痢じや食べても死ぬよ

鳩に食らわせ豆鉄砲

欲しがりません、勝つまでは

バケツを持ち田んぼに入る

田螺たにしを漁りイナゴあさ獲り

時には蛇さえ捕まえて

カエルが鳴くからカエル獲ろ

何でも食べよよく噛んで

勿体ない ぜいたくは敵だ

月月火水木金金

国があつての命だ金だ

護れ日の丸 汚すな歴史

進め一億日の玉だ

イ「ああ、腹いっぱい白いご飯を食いたいなあ」

ロ「おれも！」

ハ「ぜいたくは素敵だ」

ニ「素敵だ！がははは」

ホ「足らぬ足らぬは夫が足らぬ」

みんな「わはははははっ」

■場面は教室に作られた縫製工場となる

(ミシンの音がリズムカルに刻まれている)

(7) 勤労 (女学校)

カタカタカタカタ：

カタカタカタカタ：

学校が軍需縫製工場になりました
校舎に響くミシンの音

沢山並んだミシン

シンガポールからの戦利品

授業のかわりに

シャツ (じゅばん) や

ズボン (こした) を縫いました

1列に並んで流れ作業

袖を縫うひと

ポケットを縫うひと

襟を縫うひと

もたついていたらせかされます

一番後ろの班長が糸きり検品

次の教室でボタン付け

成果が上がればみんなで万歳

「粉じんでもうもうとする教室

肺を病む人

栄養失調の人

卒業を待たずに亡くなる人

■帰りに、かばん、ポケットなどを検査される女子生徒。
服に糸くずが付いていた事に気が付かず。

職員 「何だこの糸は！」

生徒C 「すみません。気が付きませんでした」

職員 「持ち出すつもりか！」

生徒C 「いいえ。申し訳ありません」

(8) 伝単「日本国民に告ぐ」

空からひらひらと

何かが降ってきた

アメリカ軍がばら撒いた

色とりどりのビラだった

拾ってはならぬ

日本国民に告ぐ

拾ってはならぬ

あなたは自分や親兄弟友達の命を助けようとは思ひませんか
助けたければこのビラをよく読んで下さい

拾ってはならぬ

数日の内に裏面の都市の内四つか五つの都市にある軍事施設を

米空軍は爆撃します

拾っても読んでほならぬ

この都市には軍事施設や軍需品を製造する工場があります
軍部がこの勝目のない戦争を長引かせる爲に使ふ兵器を
米空軍は全部破壊しますけれども爆弾には眼がありませんから
どこに落ちるか分かりません

拾っても読んでほならぬ

御承知の様に人道主義のアメリカは罪のない人達を傷つけたくは
ありませんですから裏に書いてある都市から避難して下さい
アメリカの敵はあなた方ではありませんあなた方を戦争に
引つ張り込んでいる軍部こそ敵です

拾ったものは警察か憲兵に渡さなければならぬ

アメリカの考へてゐる平和といふのはたゞ軍部の壓迫あっぱくから
あなた方を解放する事ですさうすればもつとよい新日本が
出来るんです

誰にも言わないで交番へ届けなさい

戦争を止める様な新指導者を樹てて平和を恢復したらどうですか

届けないとひどい仕打ちがあるぞ！

この裏に書いてある都市でなくても爆撃されるかも知れませんが
少なくともこの裏に書いてある都市の内必ず四つは爆撃します

日本が負けるとはだれも思っていなかった

豫め注意しておきますから裏に書いてある都市から避難して下さい

誰も信じなかった

避難して下さい 避難して下さい

密かにポケットへ入れて持ち帰った

青森 西ノ宮 大垣 一ノ宮 久留米 宇和島

押し入れに隠れて一人で読んだ

長岡 函館 郡山 宇治山田 津 水戸

避難して下さい

八王子 郡山 前橋 大津 舞鶴 富山

避難して下さい

福山 長野 高岡

避難して下さい

細かくちぎって便所へ捨てた

■『その夜』アイとユリが土手に座って星空を眺めていた。
満天の星だ。

ユリ 「わあ、すごい星…」

アイ 「本当にたくさんさんの星…。深い紺色のベルベットに散りばめた銀のビーズ」

ユリ 「(アイの言葉に感心している)…今日は一日中、ずっと良い天気だったね。」

アイ 「うん。朝日は薄^{うすべに}紅色、昼は瑠璃^{るり}色、夕焼けは鶉^{とぎ}色、柿色、オレンジ色」

ユリ 「オレンジ？食べたことあるの？」

アイ 「ありません！」

(二人笑っている)

ユリ 「空が好きなんだね。空の詩をたくさん書いてる」

アイ 「空はどこまでも広がってるでしょう。」

ユリ 「うん。」

アイ 「お隣の大陸も、南の島も、英も米も、空は全部つながっている。

みんな同じ一つの空。」

ユリ 「みんな同じ一つの空…」

■二人、ずっと星空を見上げている。

(9) 星の命

星… 星… 星…

人は死んだら星になるのだろうか
それなら星のきらめきはみんな
命の光なのか

たくさんの命が
いろんな色と大きさで
光を放っている

一日をいそがしく過ごした私らが
やっと眠りについてから

命の光が
やさしくやさしく
みんなに届けられるのだろうか
しずかにしずかに
降りそそいでいるのだろうか

星… 星… 星…

そうしてまた新しく
地上に生まれてくるのだろうか

(突然サイレンが鳴りだす)

(10) 空襲・避難

ウーーーーー ウーーーーー
警戒警報

ウーーーーー ウーーーーー
聴きなれた サイレンの音

誰かが叫んだ
焼夷弾だぞ！逃げろおお！

燃えている
燃えている

家が
郵便局が
学校が
街が燃えている

シューシュー… シューシュー…

焼夷弾が降ってくる
あっちにもこっちにも
火柱が上がる
見る見る広がる炎

恐ろしく低く飛んでくるB29の編隊
炎を映して真っ赤な機体

パイロットは赤鬼だ

わたしは走る

どこへ

どこへ逃げる

防空壕へ

防空壕は一杯だ

ごった返す境内

人々は逃げ惑う

土手へ

河原へ

裏山へ

畑の中へ

うつ伏せのまま燃え上がる人

直撃を受けて腕がもげた人

背負った赤ん坊に火がついて半狂乱のだれかの母親

熱風が吹き荒れ

川へ逃げた

火のついた油が流れてきて

必死で払い除けた

水に入ったまま熱さをしのいだ

(11) 焼け野原 (何もなくなった街をあるく人々)

B29が去った

街は焼き尽くされた

(川から上がり、ゆっくりと歩きはじめるユリ
道々に焼死体が転がっている)

悲しみも恐怖も通り越して
まるで無感情にそれらを眺めて歩いていく
あっちにもこっちにも
死体がころがっている)

これは夢だ

くすぶる瓦礫

これは夢だ

炭になった窓枠

これは夢だ

飴のように溶けたガラス

これは夢だ

おかあさんはどこ

これは夢だ

おとうさんはどこ

これは夢だ

これは夢だ

(一つの死体を前にして立ち止まるユリ。その死体が、アイのものだとは気が付いていない)

■身体を抜け出して、ゆっくりと立ち上がるアイ(の魂)。

アイが歌い始める。

(12) 花になりたい

花になりたい 花になって風に揺られたい
風になりたい 風になって鳥と遊びたい
鳥になりたい 鳥になって雲を越えたい
雲になりたい 雲になって空を渡りたい
空になりたい 空になって世界を包みたい
世界中の人たちといっしょに
大きな声で歌いたい
大きな声で笑いたい
そしてみんなで 花を植えたい

■みんなの顔がオレンジ色に輝いていた。たった今の体験が、まるで夢だったように、みんな元の土手にいて夕焼けを眺めていた。いつの間にかアイがいて、一緒に夕焼けを眺めている。しかし、アイの姿は誰にも見えていない。

(13) おさかな雲

西のお空を泳いでた
大きなお魚の雲に
お日様の火が移った

オレンジ色に燃えながら
あわてて泳いだお魚

あっちの雲にも火が点いた
こっちの雲にも火が点いた

東も

北も南もぜんぶ
お空の端から端までが
オレンジ色に染まった

街並みも

流れる川もぜんぶ

あなたの顔もわたしの顔も

オレンジ色に染まった

みんな見上げて笑ってた

お魚の雲も笑ってた

ああ、明日もまたいい天気だな (アイ)

■ (以下無音で、または幻想的な曲で) ふと、オレンジ色が褪めて、花
火が上がる。花火の明かりに照らされるみんなの顔。歓喜の顔だ。

アイ 「きれいだなあ」

■ 続けて上る花火の明滅する中、穏やかな表情で空を見上げながら、ゆ
っくりと闇に消えていくアイ。もう明かりに照らされる中に、アイの姿
は無い。花火は上がり続ける。